12・8平和のつどい

対話をすすめることが平和への道

12月3日、こうち男女共同参画センターソーレで、「12・8平和のつどい」がありました。戦後50年目の1995年から始まり、今年は第29回目です。会場いっぱいの参加者は138名でした。

オープニングの文化行事は、「コーラス虹の空」（医療生協組合員&職員）による合唱でした。「ピースパイオニアーズ」原水爆禁止世界大会青年実行委員会の高知大学生お二人からは、活動報告がありました。今年8月の原水爆禁止世界大会ヒロシマデー集会や広島平和記念式典に参加、記念碑巡り、被ばく体験を直接聞いたことなど、貴重な経験だったということです。若い人たちによる核兵器廃絶や平和への取り組みは希望が持て、今後も広がって行ってほしいと思います。

講演する金英丸さん

次に、金英丸（キム・ヨンファン）さんによる講演「世界の平和は東アジアから　いま日本のみなさんと考えたいこと」がありました。金英丸さんは、韓国の民族問題研究所対外協力室長で、2002～2006年に高知市の平和資料館「草の家」で事務局長を努めていました。

講演では日本を取り巻く諸問題について、話がありました。

◆情勢では今年、日米韓の軍事訓練が日本海で多く行われていて、北朝鮮にとっては脅威となっています。韓国の釜山（プサン）にアメリカの原子力空母がよく来ていて、沖縄では台湾有事に備えてミサイル基地がたくさん作られています。

◆韓国や台湾でもハンセン病の差別（隔離や堕胎など）があり、補償を求めて裁判をしています。

◆東京の靖国神社に朝鮮や台湾の人が、植民地時代の日本名で合祀されていて、朝鮮人は21000人、台湾人は28000人で、戦死の通知や遺族年金もなく裁判が続いています。

◆百年前の関東大震災朝鮮人虐殺事件では、震災の混乱の中で「朝鮮人が放火した」などのデマが流れ、6000人以上が犠牲になったと言われています。

◆日本軍「慰安婦」問題は、単に日本と韓国の外交問題、歴史問題ではなく、基本的には人権侵害の問題であり、人権と尊厳の回復に関する問題です。正しい解決としては、植民地主義や反人道的犯罪に対する法的責任の認定と再発防止、国際秩序の中で排除、疎外されてきた被害者の尊厳と価値を保護、被害者の主体性を認める過程です。

◆平和への道は、日米韓の軍事同盟をやめさせ、「対話をすすめること」が大事だと言われていました。

会の終わりに、現在、ガザとイスラエルの紛争により、多くの子どもたちの命が奪われていることに対して、「平和のつどい」の名でイスラエルに抗議文を送ることが提案、承認されました。（宮地由美）

高退協読書会案内

2月例会は「なぜ必敗の戦争を始めたのか　陸軍エリート将校反省会議」（編・解説　半藤一利）を課題本に高橋泰宏、樋口勇雄、井上圭介、山本晶子、大川法由記の5名で行われました。
第197回（4月例会）は以下のように行われます。参加希望者は直接お越しください。

第197回　4月例会　18日(木)14:00～
ムトー荘2F（205号室）
参加費　600円（会場使用料）
【テキスト】「イスラエル軍元兵士が語る非戦論」　ダニー・ネフセタイ（集英社新書）
880円＋税

（課題本紹介）「抑止力」という考えはもうやめよう―。イスラエル空軍で兵役を務めた著者が、イスラエルとアラブ諸国、パレスチナとの間で長く続けられてきた戦争を見つめていくうちに、「国のために死ぬのはすばらしい」と説く愛国教育の洗脳から覚め、やがて武力による平和実現を根底から疑うようになる、その思考の足跡を辿る。武力放棄を謳う憲法九条の価値を誰よりも評価するのは、平和ボケとは程遠い、リアルな戦争が絶えない国から来た外国人アクティビストなのである。母国のさまざまな矛盾点を指摘しつつ、軍備増強の道を進む日本の在り方にも異議を唱える一冊。

（読書メーターより）「ナチスに人権を奪われたユダヤ人が何故パレスチナ人の人権を奪うのか」日本から見た素朴な疑問に忖度なく直球で答えてくれる良書。著者は日本で暮らす元イスラエル軍人。学校教育や日常生活を通して、若い頃は「平和のための正しい戦争」と普通に思い込んでいた自らの体験を綴る。著者いわく、それは国家が主導する洗脳だと。空軍パイロットが学ぶ「帰還不能点」の話が印象的。